

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 27 日現在

機関番号：33910
 研究種目：基盤研究(C)
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22530727
 研究課題名（和文）児童・生徒を支援するための「適応度診断と介入」検査の開発と応用

研究課題名（英文）Development and Application of the Assessment Test of the “School Adjustment and Intervention” for Supporting Children and Students.

研究代表者

今川 峰子（IMAGAWA MINEKO）
 中部大学・現代教育学部・教授
 研究者番号：10123283

研究成果の概要（和文）：友人関係を4つのタイプに分類し、タイプ1（孤立する・仲間と協調しない）、タイプ2（無理に仲間に合わせ、ストレスを抱える）と学校満足度・親子関係・担任教師との関係など包括的な側面から、支援が必要な児童・生徒をアセスメントする検査を開発した。担任教師はタイプ1を把握しやすいが、タイプ2は見過ごしやすい。学習面を含めた学校満足度は、親密な友人関係、親密な親子関係、そして担任教師との心理的距離とが関連していた。さらに、この検査を通して学級経営が困難な状況が把握できた。

研究成果の概要（英文）：Children and students were classified into four areas. We developed the assessment test for the children and the students, who needed support; type 1(stood alone and did not cooperate with their friends), type 2 (was matched with another child and experienced stress), as well as the comprehensive side encloses the relations with school satisfaction, parenthood and the classroom teacher. For the classroom teacher, type 1 was easy to identify, however type 2 was not so easy to identify. The psychological distance with close friends, closeness to parenthood and the classroom teacher was related to school satisfaction and academic success. Further understand we were able to identify the difficulty in classroom administration through this study.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,900,000	570,000	2,470,000
2011年度	300,000	90,000	390,000
2012年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：学級集団・経営

1. 研究開始当初の背景

小学校中学年からは、仲間と親密な関係をむすび、つき合い方を学ぶ時期であるが、つき合いの難しさをも実感するようになる。日

本の学校教育では、グループ活動を多くして仲間と協調・協同すること、集団行動がとれることに重視を置いているため、仲間への同調圧力がかかり、葛藤・ストレスを生じやす

い。表面的には問題がないようであるが、実は仲間集団にしがみつくケース、同調へのジレンマを強く抱くケースなどが認められる。

学級経営が困難な場合ほど、担任教師はこのような状況を把握する余裕がない。例えば学級がまとまっている場合であっても、表面的に仲間と無理に合わせているために、ストレスを抱え込んで悩んでいる場合がある。このため、仲間との関係でストレスを抱え込む児童・生徒をアセスメントできる検査が必要となる。

学校生活に不満を抱き、友人関係に問題を抱え、支援を必要とする児童・生徒を把握し、学校現場にフィードバックする。その上で、学校現場の教員との検討会を設けて、本検査から得られた児童・生徒の情報と学校現場の様子から、介入の手立てを探ることができるようなアセスメント検査を完成させて、支援が必要な児童・生徒を救うことに役立たせたいとの思いが、本研究に着手した背景である。

2. 研究の目的

担任教師から見て、勝手な行動をする・孤立しているなどの児童・生徒が示すサインは把握しやすいが、その行動の背後にある友人関係・親子関係・教師との信頼関係を把握することは難しい。まして表面的には、仲間と合わせている、内面にはストレスを抱えている児童・生徒を、外面的行動から把握するのは非常に困難である。そこで、研究を進めるにあたって、児童・生徒をとりまく人物とのコミュニケーション状況を想定して、以下の5つの視点から研究を進めた。

第一に、友人関係は自己開示・親和性の程度と友人への同調性の程度から、4つのタイプに分類した。タイプ1(仲間と協調しない・孤立する)、タイプ2(無理に仲間に合わせて、ストレスを抱える)、タイプ3(友人と親密な関係にあるが依存度が高い)、タイプ4(自分の意見は主張でき、親密な友人関係を築いている)の4つのタイプを想定した。

第二に、学習面を含めた学校適応度は、友人関係のみならず、児童・生徒の生活基盤である家庭での親子関係と関連することから、親子関係をアセスメントできる検査にする。父子関係・母子関係についても4つのタイプに分類することを想定した。「反発・反抗タイプ」、「表面的服従タイプ」、「依存タイプ」、「信頼・自立タイプ」の4つである。

第三に、検査は可能な限り簡便なものを作成するが、支援と介入にかかわるリソースとしての人物との関係を担任教師・養護教諭を含めて包括的な側面からアセスメントするために、会話場面でのパーソナル・スペース(以後 PS)を測定することで、会話の相手との心理的距離を把握する。

第四に、クラス別に児童・生徒個々の学校満足度、友人関係、親子関係、担任教師、養護教諭との心理的距離を、学校現場に報告し、この結果を教員と検討する場を設ける。

第五に、包括的なアセスメント検査から学級の状態を把握する。

3. 研究の方法

(1) 予備調査

2010年9月に、小学5年生3クラス(男子55名・女子46名)、中学2年生3クラス(男子49名・女子42名)の合計192名を対象に予備調査を実施した。

この予備調査の目的は、第一に、友人・父子・母子関係の自己開示・親密性の程度と同調性の項目について信頼性と結果の妥当性を検討することにあつた。

第二に、会話場面での児童・生徒を取り巻く人物とのPSの効果的な測定方法を検討することにあつた。

アセスメント結果から、タイプ1(仲間と協調しない・孤立する)、タイプ2(無理に仲間に合わせて、ストレスを抱える)で支援が必要と判断されるケースを担任教師にフィードバックした。前者(タイプ1)は担任教師も把握していたが、後者(タイプ2)は認知されにくいことが判明した。又、PSは会話場面を作成する時の基準となる事例を挿入すること、片親家庭の児童・生徒に配慮をすることの改善点が出てきた。

(2) 本調査

<検査項目>

学校満足度項目、自己開示・親密性項目と同調性項目を一部加え、調査項目を修正した。また、PSの例示を挿入して、本調査を実施した。

	男子	女子	合計
小学4年生	123	126	249
小学5年生	131	136	267
小学6年生	131	128	259
中学1年生	135	136	271
中学2年生	126	136	262
中学3年生	126	128	254
総計	772	790	1562

「学校満足度」、「友人自己開示・親和性」、「友人同調性」、「父親自己開示・親和性」、「父親同調性」、「母親自己開示・親和性」、「母親同調性」、「友人 PS」、「父親 PS」、「母親 PS」、「担任教師 PS」、「養護教諭 PS」の12変数である。

<調査時期と調査協力者>

2012年1月～2月に、A・Bの2県で小学校3校、中学校3校に調査協力を求めた。

小学4年生～中学3年生までの調査協力者の総数は1,759名であったが、調査内容の不備なものを除外した。最終的に分析データとして利用したのは、小学4年生～中学3年生までの1,562名である (Table 1を参照)。

予備調査から小学生と中学生では12の変数の多くに、発達的な差が認められた。このため、小学生と中学生、それぞれに分けて分析した。

<分析方法>

結果の分析はすべて統計解析パッケージ (IBM SPSS STATISTICS 19 と AMOS 5.0) を利用した。

学校満足度 (5項目) 友人関係 (12項目) ・父子関係 (12項目) ・母子関係 (12項目) の得点をもとに、主因子法・プロマックス回転を実施した。学校満足度は1因子、友人関係・父子関係・母子関係については2因子が、小学生と中学生に共通して抽出された。因子負荷量の高い項目を加算し a) 学校満足度得点、b) 友人自己開示・親和得点、c) 友人同調得点、d) 父親自己開示・親和得点、e) 父親同調得点、f) 母親自己開示・親和得点、g) 母親同調得点の7変数についての得点を作成した。さらに、h) 友人 PS、父親 PS、母親 PS、担任教師 PS、養護教諭 PS を測定した。

次に、児童・生徒の変数別の全体像を把握するために、「学校は楽しい」「学校の授業はよく分かる」「行事や体験活動に参加するのは楽しい」「学校に行きたくないことがある (逆転項目)」など5項目から成る「学校満足度」に作用する前述の b)～g) の11変数について、パス解析をAMOS5.0により実施した。その結果を図式化してまとめたものが Fig. 1 と Fig. 2 である。

本研究で最も重要なのは、友人関係で「孤立している・協調できない」「同調的でストレスを抱える」児童・生徒をアセスメントして、支援に役立てることにある。このため、小学校4年～6年の9クラスの個々の児童について、12変数の結果を図と表に示した。Fig. 3 と Fig. 4 は、友人との自己開示・親和得点を縦軸に、同調得点を横軸にして友人関係を図示したものである。赤の●は女子児童と出席番号を、青の▲は男子児童と出席番号を示したものである。

最後に本研究のアセスメント結果の妥当性と今後の応用について、S 小学校の結果をC 教務主任と2日間にわたって詳細に検討した。個人別の結果をもとに、支援が必要な児童の特定と学級での様子を知ることに加えて、担任教師の学級経営等についての情報を得ることであった。

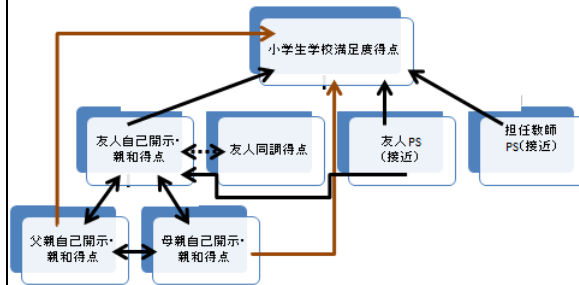
4. 研究成果

学校満足度を支える変数を、パス解析してまとめたものが Fig. 1 と Fig. 2 である。

(1) 小学生の学校満足度に関与する要因

本研究で、a) 学校満足度に関与する変数は11になるが、Fig. 1 は統計的に有意な相関が認められた変数のみを示したものである。学校満足度に関与する変数は11変数のうち、小学生については5変数が、中学生では2変数が統計的に有意な相関を示した。有意な正の相関が認められた変数を実線で、有意な負

Fig.1 小学生学校満足度に関与する変数



の相関には破線で示した。茶色の実線は小学生のみに、朱色の破線は中学生のみに有意な相関が認められたものである。

①a) 学校満足度に関与する変数は、b) 友人自己開示・親和得点、d) 父親自己開示・親和得点、f) 母親自己開示・親和得点、h) 友人 PS、k) 担任教師 PS であり、相関係数は統計的に有意であった。

②c) 友人同調得点は学校満足度と相関が認められない。

③b) 友人自己開示・親和得点と c) 友人同調得点には統計的に有意な負の相関が認められている。

④d) 父親自己開示・親和得点と f) 母親自己開示・親和得点には高い相関係数が認められている。パス解析の結果から学校満足度・友人関係の関連を説明・要約すると以下の通りである。

①「親密な友人関係が築けていること」、「父母との親密な関係にあること」「教師とは心理的に離れていないこと」の要因が学校生活に満足をもたらしている。

②友人に悩みを打ち明け、親密な関係にあると感じている児童は、無理に仲間に合わせてようとせず、自分の意見は主張できているが、自己主張ができず、無理に合わせてとする児童は、むしろ友人と親密な関係が築けていない。

③父親と親密な関係にある児童は、母親とも親密な関係にあり、逆に父親と親密な関係にない場合 (反発・反抗、又は服従) には、母親に対しても同様 (反発・反抗、又は服従) の関係が認められる。

④担任教師 PS から、教師との心理的距離

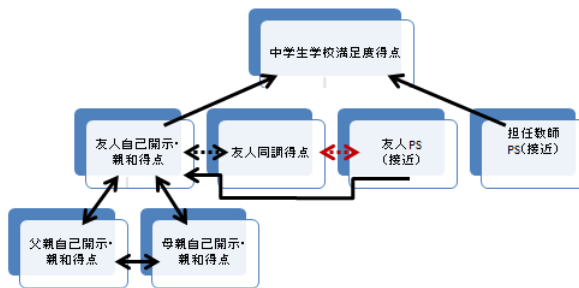
が離れていると学校生活での満足度が低い。

⑤小学生では学校生活に満足している児童は、父親・母親とは親密な親子関係にある。

(2) 中学生の学校満足度に関する要因

Fig. 2 は有意な相関係数が認められた変数を示したものである。

Fig. 2 中学生学校満足度に関する変数



①学校満足度に有意な相関が認められた変数は、b)友人自己開示・親和得点、k)担任教師 PS の2変数のみであった。

②学校満足度得点と友人同調得点とは、小学生と同様に相関が認められなかった。

③小学生の場合と同様に父親と母親に対しての自己開示・親和得点には高い相関係数が認められた。

このパス解析の結果を要約・説明すると以下の通りになる。

①「親密な友人関係が築けていること」、「教師とは心理的に離れていないこと」は、中学生の学校生活での満足度を支えている。

②親密な関係にある友人であれば、自分の意見は主張し、無理に相手に合わせることはしない。小学生よりも中学生の方がこの傾向は顕著であった。

③小学生の場合には親子関係が学校満足度を支える変数であった。しかし中学生では、親子関係の親密さの程度が、中学生の学校生活の満足度には影響しない。

④小学生の結果と共通して、父親と親密な関係にある生徒は、母親とも親密な関係にあり、逆に父親と親密な関係にない場合（反発・反抗、又は服従）には、母親に対しても親密でない関係（反発・反抗、又は服従）が認められる。この相関係数は.60 と非常に高い。

(3) 個人別のアセスメント結果について (図と表)

本調査では小・中学校の合計 55 クラス別に、友人・父子・母子関係のタイプを4象限上のグラフ (Fig.3 と Fig.4 を参照) のように図示した。他の7つの変数については、学籍番号・性別・友人関係のタイプ・父子関係のタイプ・母子関係のタイプを表示した後に、

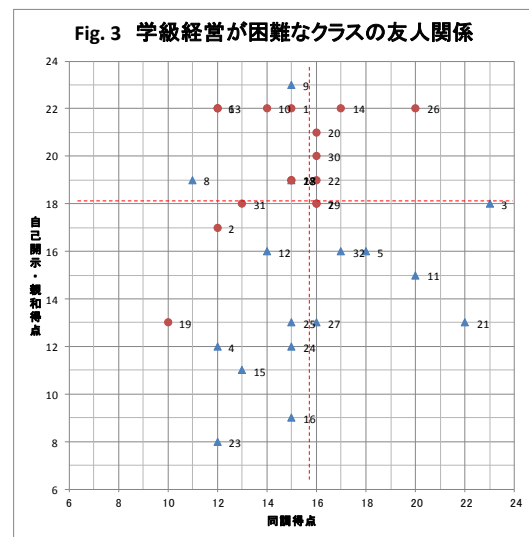
a) 学校満足度、h) 友人 PS、i) 父親 PS、j) 母親 PS、k) 担任教師 PS、l) 養護教諭 PS を Z 得点に変換した後に、次のような5段階に表示した。

- 5: Z 得点 ≥ 1.5
- 4: $1.5 > Z$ 得点 ≥ 0.7
- 3: $0.7 > Z$ 得点 > -0.7
- 2: $-0.7 \geq Z$ 得点 > -1.5
- 1: Z 得点 ≤ -1.5

b) 友人自己開示・親和得点、c) 友人同調得点、d) 父親自己開示・親和得点、e) 父親同調得点、f) 母親自己開示・親和得点、g) 母親同調得点も Z 得点に変換して、友人・親子関係の4つのタイプに色分けして表示した。

(4) 児童の個別アセスメント結果と現場教員の学級経営について

小学校については、学校での学習面・友人関係・親子関係 (教師が把握している範囲内)



で検討した結果、以下の成果が得られた。

①支援が必要とされる児童について、タイプ 1 (仲間と協調しない・孤立する) に該当し、総合的なアセスメントで支援が必要と特定したケースについては、現場教師も孤立又は勝手な行動が目立つケースとして把握していた。しかし、タイプ 2 (無理に仲間に合わせ、ストレスを抱える) は問題視されず、把握されていないケースが多い。

②タイプ 4 (自分の意見は主張でき、親密な友人関係にある) は最も望ましい友人関係のタイプであるが、現場教師の評価では自分で勝手に教師に反抗的な児童が含まれていた。

③友人関係・学校満足度・担任教師 PS の指標から、学級経営が困難なクラスでは、学校満足度得点の Z スコアが -1.5 以下の児童が多く、担任教師 PS の Z スコアが -1.5 (離れるほど Z スコアは低い) の児童が多い、さらに、友人自己開示・親和得点の Z スコアが -0.7 以下の児童が多い。

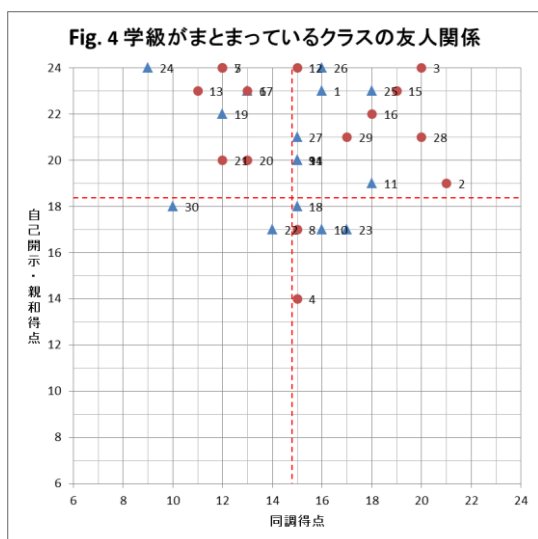
④Fig. 3 は学級経営が困難なクラスの友人関係を示しているが、自己開示・親和得点が低い男子児童が目立つ。

⑤Fig. 4 は、前年に学級経営が困難になってしまった学年のために、担当者を十分に配慮して新学期に臨んだクラスである。男児・女児共に、自己開示・親和得点が高い。ただ、その中でも自己開示・親和得点が低い児童は存在する。

(5) 今後、アセスメント検査を役立てるために

信頼できるアセスメント検査に完成させるためには、もっと多くのデータを収集する必要がある。

学級の荒れに対処するためには、新学期の



早い時期（5月頃）に、開発した検査を実施することで、学級の状況を早く把握し、早い時期に学級の荒れに対処する必要がある。

継続的に小学5年生と中学2年生を対象にして、研究を継続した結果から、早い時期にその対策を立てることと、学級運営が困難に陥ってしまった場合には、可能な限り教科担任を導入する方法も考えられる。この点はさらなる検証が必要である。

(6) 調査協力校と関連の教育委員会には、研究成果報告書を送付し、利用してもらうように働きかけた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計 4 件）

- ① 今川峰子・三島浩路（2013）児童・生徒を支援するための「適応度診断と介入」検査の開発と応用 平成 22 年度～平成 24 年度科学研究費補助金（基盤研究（C））研究成果報告書，課題番号：22530727，pp. 1-192 査読なし
- ② 今川峰子・三島浩路（2012）児童・生徒のための「適応度診断と介入」検査の開

発と応用（1）-小学5年生と中学2年生の友人とのつき合い方を中心にして- 中部大学現代教育学部紀要 4 号 11-21 査読なし

- ③ 今川峰子・三島浩路（2012）友人関係で支援を要する児童のアセスメント検査の作成-友人・親子・学校満足度・担任の学級運営等、包括的視点からの検討- 日本学校心理士会年報，4，83-92 査読あり

〔学会発表〕（計 4 件）

- ① 今川峰子（2013）児童・生徒を支援するための「適応度診断と介入」検査の開発と応用（4）日本教育心理学会 第 55 回総会 8 月 17～20 日
- ② 今川峰子・三島浩路（2012）児童・生徒を支援するための「適応度診断と介入」検査の開発と応用（3）日本教育心理学会 第 54 回総会論文集 11 月 23 日
- ③ 今川峰子・三島浩路（2011）児童・生徒を支援するための「適応度診断と介入」検査の開発と応用（2）日本学校心理士会 2011 年度大会 8 月 20 日
- ④ 今川峰子・三島浩路（2011）児童・生徒を支援するための「適応度診断と介入」検査の開発と応用（1）日本教育心理学会 第 53 回総会 7 月 26 日

〔図書〕（計 0 件）

6. 研究組織

(1) 研究代表者

今川 峰子 (IMAGAWA MINEKO)
中部大学・現代教育学部・教授
研究者番号：10123283

(2) 研究分担者

三島 浩路 (MISHIMA KOUJI)
中部大学・現代教育学部・教授
研究者番号：90454371